

変貌した故郷の風景 9

失われた空間の履歴

巨大な防潮堤…………… 10

空から見た故郷 10 「安全なまち」 14

風景が塑造する 16

失われた「空間の履歴」 18

空間の履歴 18 憂いと喜びと 21

空間の改変 23

礎石のメッセージ…………… 26

湾口防乗り越える波 26 教への風化 28

安寧祈る 31 屈を得ること 34

自然とのかかわりを問い直す…………… 36

矛盾を受け入れる 36 自然との共生 40

小さな自然再生との出会い 45

三郎川手づくり魚道ものごと

緑の回廊づくりから手づくり魚道へ…………… 46

うねる大地 46 一大酪農郷 49

「大義」の陰で 50 木を伐りすぎた 53

緑で「回廊」を 55 再起動へ 57

立ち上がった住民たち…………… 58

幻の魚イトウ 58 遼上のハードル 62

自分たちの手で 64 原風景を 67

人の環と自然の環…………… 70

人を結ぶ 70 合意と連携 73

「手づくり」へ 75 下流へ説明に 78

「人の環」こそ 79 技術の自治 84

人と自然 89 子どもも川へ 90

生活空間に新たな履歴を重ねる……………93

NPO発足 93

魚道の破損 96

「壊れる」ということ 98

「導流堤」で修復 100

15年の歲月 103

変容するコミュニティ 105

ヤワじゃない 106

第2章

広がる小さな自然再生 113

ふるさとの川を——北海道美幌町・駒生川……………114

孫の一言 114

地域の宿願 116

「魚道をつくれ」 120

実例は浜中に 122

魚道づくり始動 124

川へ入る 128

回復した遡上 131

取り組みを公に 136

恒久的な魚道へ 139

流域を結ぶ 141

ふるさとの自然を 143

民がつなぐ環——釧路地方・釧路川支流……………144

流れる水のなかで 144

最上流部へ 146

川を自由に 148

9つの障害 150

「大きな自然再生」 152

民との協働を 157

設置許可 159

流域の農家も 161

再生事業に 163

官民の協力態勢 164

シマフクロウに餌を 166

水とかわる 168

人びととの絆 170

「小さな自然再生」研究会の取り組み……………173

第3章

なぜいま小さな自然再生なのか 189

「見直し」を重ねて得られるものは……………190

——岩瀬晴夫さんに聞く

自然とかわる技術のあるべき姿……………211

——中村太士さんに聞く

小さな自然再生がひらく未来 225

桜の植樹に託す再生への願い …………… 226

苗木に願いを 226

市民の手で 227

希望をもとう 231

石を割る力 233

空間の改変と小さな自然再生 …………… 236

遠い存在 236

新たな履歴を 238

中・小技術で 241

履歴を重ね続けることの意味 …………… 244

「壊れなさ」の追求 244

「壊れない」ではなくて 247

壊れにくい川づくり 250

流域治水と「小さな自然再生」 254

生きる場の風景の取り戻しを求めて …………… 258

恐れと畏れ 258

生命息づく場 260

かわりのなかで 262

終わりにかえて——海に生きる人に、凧を …………… 267

命名の色紙に 267

新たな備えを 269

履歴を刻む 272

ふるさとの川を―北海道美幌町・駒生川

孫の一言

鮮やかな青空の下、ゆるやかに起伏する大地に敷きつめられた金色と緑色のカーペット。夏の北海道オホーツク地方は、そんな表現がふさわしい。金色は麦、緑色はビート（テンサイ）やバレイシヨ、タマネギ、豆類、牧草などの葉。重畳と波打つ畑地や牧草地は、北海道屈指の大規模畑作・酪農畜産地帯ならではの景観だ。

1990年代に駆け出しの新聞記者としてこの地で農林業を取材し、農家を訪ね歩いて何足も靴を履きつぶした私にとっては、「これぞ北海道」と感じる風景である。

その一角にある美幌町は「川の町」だ。オホーツク海に注ぐ網走川と、最大支流の美幌川の合流点に形成された沖積平野に市街地がある。アイヌ語の「ペ・ポロ（水多く・大いなる所）」が町の名の由来とされ、2023年4月末時点の人口は約1万8000人。広大な農地で畑作や

酪農畜産が営まれ、北見市と網走市の間地点に位置する物流の拠点でもある。

町の中心部から南東へ約6km。美幌峠へと標高を増してゆく丘陵地帯を縫って流れる美幌川の支流の一つが、駒生川こまおいがわである。川幅2〜5mほどで、流程約10kmのうち下流側1・7kmは道管理の1級河川、それより上流は町管理の普通河川。アイヌ語で「チェブンオンネナイ」（サケの入る大きな川）と呼ばれた。サケ（シロサケ）を「カムイチエプ」（神の魚）と呼び、大切な食料資源、文化的資源としたアイヌの人びとに恵みをもたらす川だったのである。かつては日本最大の淡水魚イトウ（アイヌ語では「チライ」など）も上ったという。

だが戦後、澄んだ流れに躍動するサケの姿は駒生川の中・上流域から途絶えた。流域での大規模な土地改良事業により、流路を真っすぐに固定されて河床と両岸の三面をコンクリートの護岸で固められ、魚の遡上を阻む落差工おちさ（小さな堰堤）が町の管理区間に9基も設けられたからだ。土地改良で排水をよくしたおかげで河畔の農地は乾き、作物の育ちは良くなって、農業の生産性は高まった。ただ、駒生川はサケだけでなく、サクラマスやカジカなど、あらゆる魚たちに「上りにくい川」「上れない川」になってしまった。

その落差工9基のうち7基に、魚たちのために簡易な魚道が取り付けられた。2011年から翌2012年にかけてのことである。第1章で紹介した浜中町の三郎川と同じように、公共事業によってではなく、生き物の豊かだったふるさとの川を再生したいと願う住民たちの手によって。

2022年7月、夏草生い茂る駒生川を訪ねた私を、一人の男性が手づくり魚道に案内して



写真1 一面緑が広がる夏の農地の傍らに立つ橋本光三さん。駒生で生まれ育ち、農業一筋に生きてきた=2022年7月

くれた。流域の駒生地区に住む元農業、橋本光三さん、1942年生まれ。仲間とともに「駒生川に魚道をつくる会」を立ち上げ、役所に働きかけて魚道の設置許可を取り付け、資金を調達し、関係機関に説明に歩いた人である「写真1」。川に入っ
て水圧に耐え、作業に汗した。壊れれば補修し、10年以上にわたって魚の遡上状況の調査や、地域の環境学習にも協力してきた。

橋本さんをそこまで駆り立てたのは25年ほど前、一緒に駒生川に釣りに行った孫の男の子が投げかけた一言だった。

「じいちゃん、これじゃ魚は上れないよ」

地域の宿願

「あの一言がなかったら、魚道づくりなんてやらなかったよ」

農地の傍らに建つ自宅で居間に腰を下ろし、橋本さんは当時を懐かしむように語り出した。会う

のは9年ぶりだった。浜中町の三郎川魚道をつくった酪農家たちと交流するために、橋本さんは2013年に浜中町に来てくれたのだった。80歳を超えたが、「指導農業士」という指導的立場にあった人だけに、話の明快さと歯切れのよい口調は変わらない。

「駒生川の落差工の下流は魚がいつぱいたまってるから釣り堀みたいでさ、孫連れてって釣りしてんだ。いっつもヤマベ（サクラマスの河川残留型）がジャンプしてるから、俺は落差工の上流に上ってると思ってた。でも、孫は『じいちゃん、ヤマベは上れても、カジカやドジョウは上れるわけないべや』って言うんだ」

孫の何気ない言葉は橋本さんの心にずしりと響いた。それは、橋本さんが、駒生川をそのような姿にした戦後の土地改良の旗振り役の一人だったからだ。

駒生地区は2022年の時点で丘陵地帯に17世帯が暮らす農業地帯だ。地区の土地改良の歩みを記した冊子によると、開拓の鋤が入ったのは明治の末年ごろ。入植者たちは牧畜や農耕、炭焼きを営んだ。昭和初期、町営の共同牧場が駒生に開かれ、良質の農耕馬などの生産が期待された。それまで駒生川のアイヌ語名（チエフンオンネナイ）にちなんで「知恵文」と呼ばれていた駒生地区は、字名改正に伴い、馬産振興を目指して「駒生」と名を変えられたのだった。

開拓者たちは草ぶきの家に起居して風雪をしのぎ、稲キビや麦を主食として森を切りひらいた。川沿いの低地の開拓は、水との闘いでもあった。自在に蛇行する原始河川の駒生川は、雨が降ると流域に水をあふれされた。火山灰土の開墾地を湿らせる水をいかに抜くか。農業で食べっていくためのカギは、この水を制御することだった。

食料増産が叫ばれて農業の機械化が進んだ戦後の高度経済成長期、公共事業による土地改良が本格化する。1955年から昭和の終わりのころまで、暗渠（覆いをするなどして外から見えない水路）で農地から水を抜き、明渠（露出した水路）工事で駒生川の流路を真っすぐに固定して三面を護岸し、川の水の流速を落とすための落差工を設ける国営、道営、団体営（市町村など）の工事が切れ目なく実施された『写真2』。道路や土地基盤の整備なども含めた土地改良の事業費は、1988年に発行された事業完成記念の冊子に記載されているだけで19億円に上る。

この冊子には、水との闘いに苦しんだ農家の男性が「土地改良の思い出」と題して書いた切実な声が記されている。



写真2 昭和50年代の土地改良事業によって直線化され、コンクリート護岸三面張りになり、落差工が設けられた駒生川。農家を悩ませた水害は減り、農業の生産性は高まったが生き物の姿は消えた（『駒生開基八十周年 駒生地区土地改良完工 駒生の歩み』から、駒生川に魚道をつくる会提供）

道営明渠排水事業が完了する前は、川は曲がりくねり、川底が浅く春先の雪解や雨の多い年は、畑の中が川のように水が流れたり、畑の低みは湖のように水がたまったり苦労の連続だった。雨の多い年は湿害により、豆・馬鈴薯・ビート・小麦など畑作物が湿害・水害で凶作になり、救農工事によって、救済されると共に、湿地畑に大排水を掘ったり、馬ソリで客土をおこなったり、大変な時代があった。また、組合内で機械で川底を掘り下げようと、話がまとまり、ユンボをたのんでやったこともあった。川底の砂利上げには能率が上がり喜んだ日もあったが完全でないので、また土砂が流れたまっしてしまい、苦労はたえなかった

水を制することは、地区の農家の悲願だったのだ。それは畑作農家の3代目だった橋本光三さんも同じだ。最大30haを超す農地で15年前までビートやバレイシヨ、小麦などをつくり、水に悩まされてきた。橋本さんは地区の土地改良期成会や明渠排水路の管理組合の役員を務め、駒生地区の自治会長として先の冊子に次のような祝辞を寄せている。

開拓の鍬が入れられてより多数の方々々が北限開拓の夢に燃え、太古の原始林に斧を入れた情熱は、私達にとって想像を絶することであつたと思ひます。厳寒の地に食糧や農具に不自由しつ、不撓不屈の精神力と強い忍耐力が今日の駒生の歴史を築かれたことは、先人の方々にこの偉大なる御苦勞に対し心より敬意と感謝を表わす次第です

土地改良事業は、先人が切りひらいた農地の生産性を高め、農家の暮らしを安定させた。だがその結果、駒生川は「排水路」と呼ばれるようになり、魚の姿は消えた。先の農家の男性は、このようにも書いている。第1章で紹介した浜中町の酪農家が、大規模農地開発の後に抱いた感想に通じる思いである。

しかし、小さい頃から、夏には河川に入ってあそんだり、魚つりをしたりしてきた川が、ブロックで三面がきれいになって、魚の住む場所がなくなり、今ではほとんどいなくなつたのが非常に残念に思う

「魚道をつくれ」

川を直線化すると流れは速くなり、洪水時に河床が洗掘される恐れがある。これを防ぐために、落差によって流水のエネルギーを減衰し、河川の勾配（上流から下流に向かっての川底の勾配）を緩和して安定させるために造られるのが落差工だ。

駒生川の落差工9基は、コンクリートや鋼板を垂直に立ち上げたものだ。うち7基は高さ1mを超え、最大で1・5m（残り2基は50cmと80cm）。遊泳力のないハナカジカなどは上ることができず、美幌博物館などの調査では、遊泳力のあるサケ科の魚でも、最も上流にある落差工の先まで上ることはできない状態だった。落差工の上流部は蛇行して河畔林に覆われ、川底にはサ

ケ科の魚の産卵に欠かせない礫（れき、小石のこと）が豊富な、原始河川の面影をとどめる自然環境が残っているというのに。

ある年の秋のことだ。

土地改良によってコンクリート三面張りとなった駒生川を「流しそうめんのようになっちゃったな」と思っていた橋本さんは、孫からあの言葉を言われて以降、落差工をしばしば見に行くようになっていた。はたして魚たちは落差工を超えているのか、いないのか。その秋、黒々とした背のサケの群れが、最も下流にある落差工の下にたまっていった。落差に阻まれて、そこから先へは行けないのだ。

サケたちは高さ1mの落差工に向かって懸命にジャンプを繰り返す。だが、幾度試みても乗り越えられない。と、1匹が落差工の傍らの土手の草地に跳びあがった。驚いたことに身をくねらせて土手を這いながら、このサケは落差工の上手へ向かい、上流の川の中に身を躍らせたのだ。

「サケが土手を上るなど考えてもいないし、人に話しても信じてもらえないでしょう」。その時の衝撃を、橋本さんは後からこう振り返っている。自分たちが利用しやすいように土地を改変した結果、ずっと昔からこの川で生きてきた生き物たちに、苦しい思いを強いている。遡上の自由を奪われながらも、魚たちは子孫を残すべく、必死に川をさかのぼろうとしているのだ。「魚の生きようとする姿、生命力に感動したのでした。それ以後、なんとしても落差工に魚道をつくりたいと思ったのでした」と橋本さんは続けている。

転機はオホーツク地方を襲った2004年の大雨だった。

駒生川は増水し、一部区間であふれたため、北海道が管理する下流側1・7km区間で河川改修計画が2006年から動き出した。道は「川づくりで地元の意見を反映させたい」と、住民らによる「駒生川ワークショップ」という話し合いの場を設けて意見を求めた。地区代表として、ワークショップの委員に選ばれた橋本さんは強く訴えたのだった。「改修して川を良くするのなら、その上流にある落差工にも魚道をつくって魚が上れるようにしてくれ」と。

「俺は駒生で生まれ育って、小さいころは駒生川の上流で魚も釣った。今とは比べものにならないくらい魚がいたよ。ヤマベもドジョウもカジカも、エビも。フナもコイも。本当はいろんな魚が来る川なんだ」。その駒生川の流れを見下ろしながら、橋本さんは私にかつての川の姿を語ってくれた。のっぺりとコンクリートで覆われた真つすぐな流路の傍らで、言葉には愛おしさと苦さが入り混じっていた。

「家を継いで農業をするようになってからは、川を直線化して、農業生産に結び付けることばかり考えていた。だから、川にも魚にも目なんか向けなかった。でも孫に言われて、魚のいない川、上れない川でいいのかって思うようになって。戻すのは簡単じゃないけど、俺が生きているうちに罪滅ぼしがしたいんだ」

事例は浜中

ワークショップは2006年から年に2〜3回開かれ、橋本さんは落差工への魚道づくりを

しつこく主張し続けた。やがて「このままではサケがかわいそうだ」という橋本さんの強い思いに委員たちも共感し、ワークショップでまとめた道への提言には「落差工をなくし下流から上流をつなぐ」という項目が盛り込まれた。

だが、国営と道営の排水事業で設けられた落差工は、道がワークショップの意見を踏まえて改修を計画している区間よりも上流にある。落差工のある区間の河川管理者は美幌町であり、落差工は国や町の財産だ。このため道に魚道設置を求めても「こちらでは手の出しようがない」と、すげない回答だった。

どうしたら魚たちを上らせることができるだろう。

カベに突き当たった委員たちのなかから、ワークショップとは別の団体をつくり、実現の道を探ろうという声が高まる。そうして立ち上がったのが「駒生川に魚道をつくる会」だった。2009年10月のことだ。橋本さんを会長に、流域住民、美幌博物館の学芸員、魚類を研究する東京農業大学オホーツクキャンパス（網走市）の学生など、設立時の会員は9人。早速、落差工の所有者である国に魚道設置を求めたのだが、「排水事業は完了済み。今から魚道設置はできない」と、こちらもつれない返事だった。

「なら、自分たちでやってみっか」

そんな声が、メンバーの間から自然にわき上がった。ワークショップの委員を務め、「つくる会」に加わった札幌の河川技術コンサルタント、神保貴彦さん（1956年生まれ）は振り返る。「何かできるんじゃないか。落差工に石でも積み上げて、魚を上らせることができるか――」